



「自分づくり」を支援する教育実践の創造と展開(資料)

三木, 裕和

(Citation)

日本特殊教育学会第55回大会(2017愛知大会) 自主シンポジウム1-7 「自分づくり」を支援する教育実践の創造と展開

(Issue Date)

2017-09-16

(Resource Type)

conference object

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006479>



「自分づくり」を支援する教育実践の創造と展開

鳥取大学地域学部教授、鳥取大学附属特別支援学校長（併任）三木裕和

hmiki@rs.tottori-u.ac.jp



①長く特別支援学校教員をしてきた筆者から見て、本校児童生徒の授業に対する信頼感はかなり高い。授業時間だから座るというのではなく、何か楽しいことが始まるという予感をもって座っている。本校の授業が教育的価値をもって展開されている証左であろう。少人数学校ということもあり、教師の子どもへの接し方も落ち着いている。②本校は今年、創立40年を迎える。この期に当たって、「あそび・生活・作業単元学習」をベースにした教育の特徴を振り返る。知的探求を重要な契機とした生活単元学習の可能性を報告したい。③また、国公立では全国で唯一とされる知的障害高等部専攻科について、昨年度実施した修了生悉皆調査をもとに、これまでの実践を総括し、将来構想について考えたい。自己運動としての「自分づくり」と、昨今の障害児教育の流行との相克をどう捉えるのかも、議論に期待したい。

① 本校教育の印象：私的感想

私は養護学校教員として32年を勤務しました。鳥取大学に来るまでにも、鳥取大学附属特別支援学校の公開研に参加したことがありますが、その時の印象は二つです。

一つは、児童生徒が授業を楽しみにしている様子がかがえるということ。授業が始まると、子どもたちは、何となく楽しそうに席に着いていました。「そんなことは当たり前」のように思われがちですが、同業者から見ると、これがなかなか難しいものです。「授業だから席に着きましょう」という学習規律が前提にあって、それに従う、もしくは従わせるという雰囲気になりがちです。「授業そのものに期待感を持っている子どもたち」という印象を感じたものです。これは一朝一夕にできることではありません。通常の授業が、教育的価値を持って展開されている、その蓄積だと思います。

もう一つは、先生たちが穏やかに子どもに接しているという印象です。これも簡単なことではありません。行動上の問題が多い自閉症の子どもたちがいますし、ダウン症の子どもたちも時に強い自我を発揮します。軽度知的障害の青年期は、精神的自立の要求とも相まって「反抗」の姿を見せやすいものです。しかし、教師たちの態度は落ち着いていて冷静でした。教育的な素養を感じましたが、これも取り繕ってできるものではありません。

本校校長として勤務して2年目ですが、当初に感じた印象はそのまま維持されています。学校説明会で外部の

方に説明するときも、この2点は自信を持って説明できます。附属校としての使命を自覚して、授業づくりへの努力が継続されたこと、児童生徒数が少なく、子どもたちの事情をどの先生もよく知っていることなどが、その理由だろうと推察しています。

② 学部ごとの教育思想・教育実践

さて、学部ごとの教育思想・教育実践について概括します。一つの学校においても学部ごとに独自の気風がありますが、私はそれは悪いことではないと思っています。違いがあっても、それを相互に理解し合う努力こそが大切と考えています。以下、本校の研究紀要（2016年版）から、各学部の特徴的な記述を拾い、説明を加えていきます。

(1) 小学部

小学部は「一人一人が夢中になる遊び」をテーマに、それを生活単元学習に位置づけて取り組んでいます。研究紀要で紹介された単元は「夏をたのしもう～感触遊び・水遊び～」であり、寒天ゼリーや宝物入りの氷などを素材としています。やりたいという気持ち、もっとやりたいという行動、友だちとのトラブルなどが記述されています。ウォーターランド（水遊び）でも子どもの自我の発揮や子ども相互のやりとりが記録されます。特徴的な記述が以下に見られます。

実践の検討にあたっては、児童の主体的な遊びや自己充実する姿を促すために、教師が直接的に介入するのではなく、まず“環境による誘導”を行うことが重要であると考えている。

物的環境では、適度な空間の広さ、素材の特性・数に配慮した。適度な空間の広さの配慮点は、自分がやりたい遊びを十分に実現することができる広さがあること、人と人との距離が離れすぎない広さであることである。素材の特性・数の配慮点は、児童が興味・関心をもつことができる素材であること、素材を使った遊び方に自由度や発展性が見込めること、やりたい遊びを十分に実現することができる数があることである。

人的環境では、教師の役割が非常に難しいところであり、実践の検討の中で一番時間を割いてきた部分である。過去には、教師が率先してダイナミックに遊ぶことが遊びのモデルになるととらえ、教師主導で児童の心の盛り上がり誘導するような実践があった。児童と教師のやりとりが活発に見え、とても楽しそうな雰囲気を感じられる。しかし一方で、その遊びは教師に対する依存が高く、受け身的なゆえに、本当に自分がやりたい遊びを実現できているのか、充実感を味わうことができているのか等の疑問があった。この疑問に対する解釈は複数考えられる。①児童には発達上の課題があり、教師

のダイナミックな遊びの手本を求めている。大人との関係が大切と考え、教師主導の継続が必要という解釈、②教師の主導性とその時間の遊び方を非言語的に伝えており、このことが児童にとって評価の対象になっている可能性がある。児童は、本当は自分で遊ぶ力が内在しているにも関わらず、その力が十分に表れていない可能性があるという解釈の2点である。こうした議論は、②の解釈で一致した。教師の過度な主導性は、児童が自分自身で遊び始めたり遊びこんだりする機会を失い、遊びそのもののイメージを損ねることに繋がる可能性がある。児童の遊ぶ力を引き出すための教師の役割は、基本的に見守ることである。そして、ただ見守るのではなく、児童の遊びに寄り添い、児童の“ちょっとこういうことをやってみようかな”“～したら、こんなことができちゃった”という遊びの中の工夫や偶発的な気づきを大切にしたい。遊びの楽しさは、児童が自分らしく遊びこみ、遊びきる中で味わってほしいという願いがある。遊びを教師に教わるといふ依存的なものではなく、児童が主体性を発揮して遊んだ偶発的な気づきによって、自己のエネルギーを自ら味わうことに意味があると考え。児童自身が遊んだことに充実感を得て満足するためには、評価に繋がるような言葉かけを控え、その子らしい遊びに対して共感的に受けとめる姿勢が必要である。しかし、必ずしも共感的な言葉かけが必要とは限らず、教師が言葉で直接的に伝えなくても十分に児童に伝わる安心感のある空間の雰囲気づくりに取り組まなければならない。この時、児童の姿を受けとめるあたたかなまなざしをもってメッセージが伝わる関係づくりを大切にしなければならない。これらのことが、教師の役割を考える際の基盤となるものである。

この考え方は「健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う」「他の人々と親しみ、支え合って生活するために、自立心を育て、人とかかわる力を養う」など、幼稚園教育要領の流れを受け継ぐものと言えます。知的障害、発達障害の子どもたちに対して、社会適応的な行動の獲得が至上命題とされる昨今の障害児教育にあって、むしろ、教育本来の自由な教育姿勢を示しています。

しかし、一方で、教師の指導性と児童の主体性が競合関係として捉えられていること、および教材の持つ文化的価値は、教師による教育的働きかけなしに自動的に子どもたちに伝わるものではないことなどに、議論の余地が残されていると言えます。

(2) 中学部

中学部の取り組みは本校の中で、いわゆる「生活単元学習」のイメージに最も近いものでしょう。しかし、かつて文部科学省が提唱した「児童生徒の実態等に即した規則的でまとまりのある学校生活を送れるようにする」「社会生活能力の育成を教育の中心的な目標とし、身近生活・社会生活に必要な知識、技能及び態度が身に付くよう指導する」「職業教育を重視し、将来の生活に必要な基礎的な知識や技能を育つようにする」(学習指導要領解説－各教科、道徳及び特別活動編－平成12年3月)などの目標からすると、ずいぶんと知的活動が重

視されたものと言えます。以下、中学部の記述です。

今年度は学部テーマを「新たな価値や自分と出会う探求的な活動」とし、生活年齢とともに発達年齢に合った学習内容や教材の設定、生徒が主体的に学習に取り組み、その中で新たな価値や自分と出会っていくための支援(グループ編成、学習活動、多様な価値と出会ったり、また互いに認め合ったりする学習場面の設定等)を行った。そして事例研究を行い、生徒の変容をとらえるとともに、変容を促したものについて、教師集団で検討していった。

中1 Iさんは、グループの学習で同じ目標を持つ仲間と、体験的な活動を経験し、みんなとできた感動や感情の共有を体験したことで、自分の苦手なことを友だちに言って助けてもらったり、得意な場面では、自分から友だちに声をかけて助けたりする姿が見られるようになり、友だちとの関わりが広がった。中2 Fさんは、自信のある活動で認められたことや手ごたえのある活動をやり遂げたことで、活動に対し「できない」と言うことが減り、やってみようとするが増えた。また高等部など他学部の友だちとの交流も広がり、友だちに対し、より肯定的な発言が増えた。中3 Hさんは、学級や学部等の友だちとの活動を励みに新しい活動に向かうようになり、さらに「みんなでしましたね。」と、仲間意識の芽生えが感じられる発言が増えた。

事例研究や合同生活単元学習の実践を通して、生徒の変容を促したものは何だったのか、エピソード記録や自己運動サイクルをもとに、教師集団で話し合った。

「ふれあいまつり」「レッツ鳥取じまん」の単元では、縦割りグループやペアでの活動で、生徒同士が自分のよさや持ち味を發揮しながら、仲間として一つの目標に向かって協力して取り組んだ。「ふれあいまつり」では、一人一人が自分の仕事に責任を持ち、同じグループや学部の仲間と力を合わせてお店を開く姿、よりよいお店を作るにはどうしたらいいか意見を出し合い話し合って工夫する姿が見られた。「レッツ鳥取じまん」では、それぞれのグループで協力して調べ、発表したり、収穫祭で作るものを話し合って決めたりする等、思いを出し合い、認め合って物事を決めたり協力して活動したりする姿が見られ、集団としての育ちが見られた。

また、「レッツ鳥取じまん」の単元では、鳥取県東部の陶芸を教材とし、生活年齢にふさわしい手ごたえのある学習内容に取り組んだ。地域の陶芸家というプロの方々との出会い、インタビューや見学をしたり実際に陶芸を教えていただいたりして、本物との出会いをしたことは、生徒が新しい世界に興味関心を持ち主体的に学習に取り組むきっかけとなった。さらに、粘土グループでは粘土ができないという失敗や経験を経たこと、陶芸品グループでは分担して調べ、グループ全体で共有して多様な価値に迫っていったこと等、それぞれのグループの実態にあわせた、互いの思いを出しあい、試行錯誤しながら自分たちで答えを見つけていく探求的な活動を設定したことにより、仲間との信頼関係ができていった。具体的な学習活動を通して、互いの思いを交換し、またそれを全体で共有すると言う繰り返しが、新しい価値への気づきにつながることを確認できた。

事例研究では、教師全員で多様な視点から生徒について語っていくことができ、生徒理解とともに教師の学びにもつながった。

中学部自身は、課題として、グループごとの交流や新たな価値の共有に弱点があったこと、事例研の持ち方の工夫などを記しています。

中学部年齢は思春期ですが、それは知的障害があっても基本的には同じ心理機制を持つと考えます。大人の価値観への従属を拒否し、友だち同士の価値観の交換を必要とし始めます。自立への準備期としての生活単元学習が社会適応だけに傾斜することなく、集団的思考をくぐり、自己信頼を形成するものとなるためにはどうすればいいのか。鳥取の文化や歴史を尊重してきた中学部の伝統を尊重しながら、検討する必要があるように思います。

(3)高等部本科

高等部には地域の中学校から進学する軽度知的障害の生徒たちが多く存在します。高等部教員の話は、彼らの「青年期の葛藤」をどう理解し、どう指導するかに集約されます。高等部卒業を3年後に控えている、というファクターも無視できません。ここでは、F君(1年生当時)の事例が特徴的です。

「個人事例(F) 研究 エピソード記録」

高1が職場見学・体験を行った。「パン屋P」の製パンコーナーでパンの生地に触ることができるが、Fは触らず。同店のカフェコーナーで昼食時、パンを買うためにトレイとトングを取ったが、選ぶことができなかった。結局昼食は何も食べなかった。

「S作業所」では、巾着袋の組み立てを生徒が体験をする。Fは、やり方を見ようとしなない。作業が始まっても、やり方がわからないからできない。結局何もしないまま終わった。作業の時間が間もなく終わろうとしていた時、担任(H)が外に連れ出し、話を聞くと「面倒くさいから、したくない。」と答える。

夕方、保護者に連絡を取り、現場実習のことについて懇談をした。

○意思表示ができないことについて

(解釈) Fは「無理。」「疲れた。」「面倒くさい。」は言える。成功体験がないのではないだろうか。がんばっても意味がないと感じることが多かったり、固まっていると「そんな態度ならしくなくていい!」と言われていたのかもしれない。

「あ、やれるんだ。」「がんばってよかった。」という成功体験の積み重ねを取り入れていく。

○6月ごろのFの変化を語り合う

・人間関係ができてきたように思う。たとえば、教師をからかったり、作業班で自分のアイデア(粘土のつめかた)を言い出したり、教師をつんつんと触って話しかけたりなどである。・6/16の校外学習では食券も買え、おにぎりも選んだ。固まるものが減ってきた。

(解釈) 学校に来ていろいろな経験をしている、このめまぐるしい生活に付いていっている。「固まっていたも悪いことは何もなかった」「固まっていたも仕方ない」と思え始めたのではないだろうか。

○(書道)書道パフォーマンス

大学生の書道パフォーマンスのDVDを流したとき、顔を起こして見ていた。興味はある。大学生に初めて教えてもらった日、皆の前では書けなかったが、担当教師(T)と二人の時に「ㇿ(りっしんべん)」を書く。それを教師や友だちにほめられた。次の授業からは皆と書くようになった。公開研の前日、父に「ㇿ」の書き方を聞く。「やる」と決めたらやる、それまでの「間」が必要。自信がなければ大人に聞く。

(解釈) 中学校の時は、したくなくばしなくても良かったが、今は適当なところでは許されない。自分に合う水準になるまで先生が見届けてくれる。本当にいい出来でないといふ褒めたりしない。居残りを言い渡されても嬉しそうにしている。

(学習の中に取り入れていく教育内容、視点)

・本人が「やる」と決意するまで(自分と折り合いがつくまで)の間をしっかりと確保。

・担任、担当教師(縦の関係)とは違った大学生(ななめの関係)の存在。仲間存在。

・家族の支え(頼りになる父)。

Fについて: 自我の誕生期~自己形成視獲得の時期

間違えてはいけないという不安感が強く、見通しが持てない活動に取り組めないことがある。与えられた簡単なテーマの中で文字を選んだり書いたりする時には、「何でもいい。めんどくさい。」と言って、教師が選択肢を出しても選べないことが多い。「何のためにせなないけない。(しないといけないのか)」と、なかなか学習に意味が見出せないようだが、教師や仲間の働きかけにより見通しを持ちやすくなり、参加できることも増えてきた。具体的な手順やすべきことを一つ一つ確認しながら肯定的評価をすることで、安心して取り組めるようにする。また、最後までやり遂げた達成感や仲間と一緒に活動する心地よさを感じることができるよう、活動を工夫し、やってみたら案外良かったと思える経験を積むことで、活動への意欲を引き出すようにする。

高等部の週時程表は、週3回、作業学習があるなど、一見すると社会適応型に見えますが、授業研究や事例検討ではさすがに「自分づくり」を掲げる学校らしい討論が行われます。本人の立場に立って、その試行錯誤の過程を理解しようとする姿勢です。上記の記述にもそれが表れており、特に逡巡を含んだ書きぶりに私は好感を持ちます。

高等部、青年期になると、障害からくる特徴なのか、生育環境からくる問題なのか、はっきりと見極めることが難しくなります。そのどちらも影響を与えているのが実情でしょうが、しかし、改めて、障害、発達、生活の観点から生徒の課題を把握し直す時期でもあります。教師の側に、発達の主体的運動を見極める力が弱いと、どうしても社会適応的評価とその直接的指導に傾くおそれ大きいからです。どの学校の高等部も、その瀬戸際に立たされて実践に臨んでいるように思います。

③ 高等部専攻科の可能性

よく知られていることと思いますが、本校高等部専攻科は、知的障害としては全国唯一の存在です。

2016年は専攻科10周年を経て、実践の蓄積を振り返る大切な年となりました。修了生の悉皆調査、学会報告、実践をまとめた記念出版など、これまでの実りを収穫することができました。

専攻科については報告すべき事が多くありますが、調査結果や出版については他の機会に譲るとして、専攻科で取り組まれている「七転び八起きの実践」の一端を、三木研究室の大学院生Fさんの記録からご紹介します。

2016年12月7～9日 専攻科研修旅行、大学院生Fさんの同行記

○ホテルはどこだ～？

一日目、夕食が終わり、京都駅の空中広場探索のあと、ホテルへと向かうときの話である。アーバンホテルに泊まる予定であり、到着予定時刻は午後8時40分だったが、実際に到着した時間は9時50分頃だった。到着予定時刻よりも1時間余計にかかった。その原因は簡潔にいうと道に迷ったのである。京都駅の周りは交通状態が大変混雑している。学生たちもあっちこっちに歩きまわっていた。筆者も初めての町だったので、方角がわかりやすく教えようにも教えられない状態だった。H先生が、わからなければ地元の人に尋ねてみたらどうという、学生たちは町の人に聞きながらホテルに向かっていった。その間の会話はよく筆者自身は覚えていないが、同じ場所を行ったり来たりしていた。アーバンホテルの最寄駅である深草駅周辺は住宅街(降りた場所)で本線を挟んで向こう側は大きな道路があった(アーバンホテル側)。住宅街を歩き回っている途中、住民の人に道を聞いていると、学生たちが歩き回って疲れていたためかちゃんとした日本語で話せず、住民に「外国の方ですか？」と尋ねられたこともあった。結果人に聞いてはあっちにいき、また人に聞いてはそっちに行きを繰り返しているうちに、ホテルに無事到着した。

考察

初めての土地や鳥取とは違った環境の中で計画通りに行動するのは難しいことだ。研修旅行のために約一か月前から準備していたとはいえ、土地感までは調べきれない部分がある。そのなか、彼らなり不器用ながらも周りの人に聞き、仲間同士(または先生や筆者と)で話し合いすることで目的に到着したことに意味があると思う。自分一人では解決できないことを仲間や周りの人の助けを借りて、問題を解決していくこともまた(思春期・)青年期の「自分づくり」に必要なことだと筆者は感じている。

○問題解決能力を発揮！！(Y君)

二日目の朝、アーバンホテルを出発し伏見稲荷を見学したのち、宇治市へと向かっていく途中の出来事である。当日荷物を預けるロッカーを探しており、どこで預けるかで学生たち(特に先生方や筆者はロッカーと電車に乗り遅れないことで頭がいっぱい)は頭がいっぱいだったと思う。電車にのり、電車が走りだしてから宇治駅に着くまでの出来事である。筆者「ぎりのれたな」N君「テラフォーマーズでこのキャラわかりますか？」(隣でそのキャラの真似をする)筆者「えっと、もう一回やってくれへん？」旅行先でも普段の会話をする筆者とN君、するとS先生「あれ？Y君は？」筆者「あれ？ほんまや、おらへん。N君、Y君の姿みえる？」N君「そういえば、いませんね」(冷静？いう)S先生「ちょっと隣の列車みてくるね」S先生が帰ってくるとD君「今、Y君から連絡がありました。」メールにはY君が電車に乗り遅れたことが書いてあった。そして、次の電車に乗ってくることをD君(二年生)に伝えていた。宇治駅に到着し、約15分後、次の電車が見ついた。Y君「遅れてごめんなさい」D君「Y君大丈夫だった。すごく心配しましたよ。」H先生「よかったです。無事に来れましたね。どうして乗り遅れたんですか？」Y君「乗り遅れても、次の電車がくるから大丈夫かと思いました」筆者「確かに。さすがやな」H先生「乗り遅れたとしても、ち

ゃんと二年生に先輩に連絡できていたので、ばっちぐーですよ」Y君「はい」

考察

問題解決能力の目線から見ると、日常生活で実際に解決できている例と言えよう。日ごろから困ったときは先輩や先生方に連絡するという習慣がここに来て、活かされている場面だった。またここで強調したいことは、Y君の日ごろの練習が実際に活かされていることはもちろん、D君がY君のSOSをきちんと受け取め、周りに共有していることも重要なことだ。普段の仲間関係が成立していなければ、Y君がD君に連絡することもなかったであろう。

○筆者の思う(今回の)研修旅行の教育目的・目標

高等部専攻科は青年期にある生徒に対して、「学校から社会へ」「子供から大人へ」の二重の移行支援する教育を行っている。生徒一人ひとりの心の育ちを的確にとらえ、自らの目標や夢の実現に向けてチャレンジする心を大切に、青年期の「自分づくり」や社会生活への移行を支援している。今回の研修旅行は学生たちで研修計画の他、交通手段・日程・研修先・研修先を案内する役割分担を決定している。また自分たちで決定したこと調べてきたことを元に研修旅行を行っている。先生たちや筆者は主に専攻科で大事にしている「見守り支援」の体制で臨んだ。研修計画や調べた内容と実際に研修旅行を行って見たときの違いを実感し、その違いを仲間とともに問題を解決していく力を今回の研修旅行で求めているのだと筆者は感じている。実際にそういう場面が多く見られたような気がしている。

高等部専攻科は、教室に入ると雰囲気違います。学生が新聞を読んでいたたり、「先生、コーヒー、飲みますか」と言ってくれたりします。大人の雰囲気です。

実際には、社会人としての諸能力に課題はあります。上記のように、ホテルに時間どおりに辿り着けなかったり、乗る電車を間違えたり。この他にも、訪問予定の施設が休館日だったり、旅行途中で訪問先を巡って意見が対立したり、そんな出来事が多く報告されます。専攻科の教師はそれを辛抱強く見守ります。これは同業者として、なかなかの苦行だろうと推測します。

こうやって見てくると、七転び八起きの実践が専攻科だけの独自性であっていいのか、学校全体として教育課程を再考する必要があるのではないかと、との希望も起きてきます。これは本校の今後の検討課題でしょう。

また、19歳、20歳の年齢を発達的にどう位置づけていくのかも、再考の時期に来ているように思います。単に2年を上乗せしたのではない、固有の価値があるのではないかと。18歳からを大人として扱おうとする現代日本にあって、教育実践の側がこれをどう考えるか、私たちの側にボールがあるように思います。

<むすび>

・発達における試行錯誤、失敗の意味を検討していただきたい。新学習指導要領の「資質・能力」論との関連からも。

